

新 宮 遺 跡 III

(E 地点の調査)

2017

本 庄 市 教 育 委 員 会

新^{しん} 宮^{ぐう} 遺^い 跡^{せき} III
(E 地点の調査)

2017

本庄市教育委員会



新宮遺跡E地点 1号土坑出土の縄文土器

序

本庄市はかつて中山道随一の繁栄を誇った宿場町として、また国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そのような豊かな歴史的背景と文化的風土をもつ本庄市は、数多くの埋蔵文化財にも恵まれ、旧石器時代から近代に至るまでの多様な遺跡が市内の各所に分布しています。そのうちの縄文時代については、大規模な環状集落が3つ並ぶ全国的にも貴重な例が、本庄市共栄から児玉町共栄にかけて所在しており、本書で報告する新宮遺跡は、その環状集落群の南側のものです。新宮遺跡の環状集落については、他の2つの環状集落と比べると過去の発掘調査面積が少なく、全貌が明らかにはなっておりませんが、中央に直径100m程度の広場を持つ、外径200m程度のドーナツ状の大集落と考えられております。

今回、発掘調査を実施したE地点についても調査面積が少ないため、集落の全体構造に関する知見は得られませんでした。児玉地方で最大級の縄文土器が出土するなど、著しい成果が得られました。

本書に報告されたような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちの使命であります。今後は、本書が学術研究の発展に資するとともに、一般にも広く活用され、郷土史への関心や埋蔵文化財への理解がいつそう深められることを願ってやみません。

最後になりましたが、現地の発掘調査から報告書の刊行にあたり、文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました株式会社桂紙業様とご協力とご尽力を賜りました多くの皆様に対して、心からお礼申し上げます。

平成29年12月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町共栄字南共和322番地に所在する新宮遺跡（No.54－030）E地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社桂紙業の委託を受けて本庄市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は的野善行が担当し、現地調査には小此木真理（有限会社毛野考古学研究所）が専従した。
4. 発掘調査から報告書作成・刊行に至る経費は、株式会社桂紙業が負担した。
5. 発掘調査は、工場建設予定範囲のうち、工事により遺跡に影響が及ぶ32㎡について実施した。
6. 発掘調査期間および整理期間は以下のとおりである。
 発掘調査 自 平成29年4月24日 至 平成29年5月2日
 整理作業 自 平成29年6月9日 至 平成29年12月11日
7. 発掘調査に関する発掘基準点測量、遺構測量は小出拓磨・小此木真理（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
8. 整理作業・報告書刊行に関わる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
9. 本書の執筆は、Ⅰを本庄市教育委員会事務局、Ⅱ・Ⅲを小此木真理が担当した。
 遺物実測は、土器を小此木真理、石器を土井道昭（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
10. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関連する資料は本庄市教育委員会において保管している。
11. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々からご指導、ご協力を賜りました。
 感謝申し上げます。（順不同・敬称略）
 鈴木徳雄 山口逸弘
12. 発掘調査、整理調査および報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査・整理調査・報告書刊行組織（平成29年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育	長	勝 山 勉
事務局	事 務 局	長	稲 田 幸 也	
	文 化 財 保 護 課	長	杉 原 初	
	課長補佐兼埋蔵文化財係	長	恋 河 内 昭 彦	
	主 査	査	松 本 完	
	主 査	査	塩 原 浩	
	主 査	査	徳 山 寿 樹	
	主 任	任	的 野 善 行	
	臨 時 職 員	員	中 嶋 淳 子	
	調 査 員	員	小 此 木 真 理 (毛野考古学研究所)	

目 次

巻頭カラー写真	第Ⅰ章 調査に至る経過…………… 1
「新宮遺跡E地点 1号土坑出土の縄文土器」	第Ⅱ章 遺跡の環境…………… 2
序	1 地理的環境
例 言	2 歴史的環境
目 次	第Ⅲ章 調査の成果…………… 3
挿図目次	1 調査の方法と遺跡の概要
挿表目次	2 検出された遺構と遺物
写真図版目次	写真図版
	抄録
	奥付

< 挿 図 目 次 >

第1図	新宮遺跡調査地点	第5図	遺物出土状態図
第2図	周辺遺跡	第6図	土層断面・エレベーション図
第3図	新宮遺跡E地点全体図（古墳時代）	第7図	遺物実測図（1）
第4図	新宮遺跡E地点全体図（縄文時代）	第8図	遺物実測図（2）

< 挿 表 目 次 >

第1表	土坑一覧表	第4表	遺物観察表（土器）
第2表	ビット一覧表	第5表	遺物観察表（石器）
第3表	溝一覧表		

< 写 真 図 版 目 次 >

写真図版表紙	新宮遺跡 E地点（北から）	図版3	出土遺物（1）
図版1	新宮遺跡E地点全景（左上が北）		1号竪穴住居跡
	1面目 遺構検出状態（西から）		2号土坑
	1号溝 完掘状態（西から）		3号土坑
	2面目 遺構検出状態（北西から）	図版4	出土遺物（2）
	2面目 全景（北から）		3号土坑
			5号土坑
図版2	1号竪穴住居跡 遺物出土状態（西から）		6号土坑
	1号竪穴住居跡 完掘状態（西から）		8号土坑
	1号土坑 遺物出土状態①（北から）		調査区外
	1号土坑 遺物出土状態②（南から）		
	4号土坑 完掘状態（東から）		
	1・2・4号土坑 完掘状態（東から）		
	5・6号土坑 完掘状態（東から）		
	8・9号土坑 完掘状態（北東から）		

第Ⅰ章 調査に至る経過

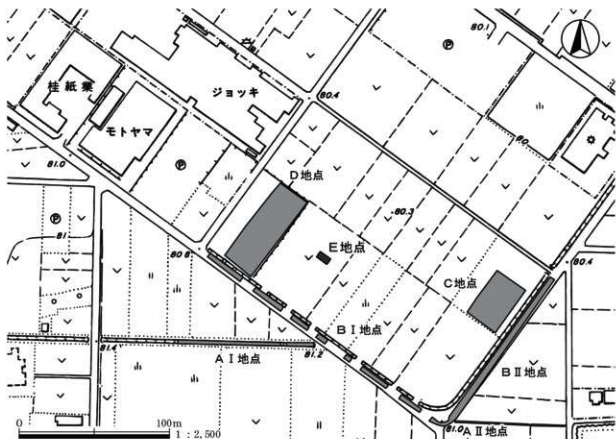
平成 28 年 10 月 25 日、株式会社桂紙業（以下、事業主）より工場建設を予定している本庄市児玉町共栄字南共和 324-1 ほか 5 筆にかかる『埋蔵文化財の所在およびその取り扱いについて』の照会文書が本庄市教育委員会（以下、市教委）に提出された。これを受けて市教委では『本庄市遺跡分布地図』等を確認したところ、同地が周知の埋蔵文化財包蔵地である新宮遺跡（県遺跡 No. 54-030）の範囲内に所在していることが判明した。

市教委は、埋蔵文化財への影響を確認するため、同年 11 月 16～18 日、翌 29 年 1 月 24 日、3 月 1 日と 3 度にわたる試掘調査を実施したところ、縄文時代から古代にかけての堅穴住居跡等が多数検出された。そのため、事業主と埋蔵文化財を保存するべく協議を重ねたが、事業計画上約 32 ㎡については現状保存が困難であり、他の部分については保護層を確保し現状保存することになった。現状保存が困難な範囲については記録保存のための発掘調査を実施する運びとなり、事業主と発掘調査のための業務委託契約を平成 29 年 4 月 10 日に締結した。

事業主は平成 28 年 10 月 25 日付埋蔵文化財発掘届を提出し、市教委は平成 29 年 4 月 18 日付本教文発第 19 号で埋蔵文化財発掘調査通知を県教育委員会宛てに送付した。発掘届に対して県教委から事業主宛てに「発掘調査が必要」である旨の指示通知が平成 29 年 4 月 25 日付け教生文第 4-45 号にて送付された。現地における発掘調査は平成 29 年 4 月 24 日～5 月 2 日に実施された。

出土物にかかる法的手続きとして、市教委は埋蔵物発見届を平成 29 年 5 月 1 日付け本教文発第 23 号にて児玉警察署宛て提出し、同保管証を平成 29 年 8 月 17 日付け本教文発第 134 号にて県教委宛て提出、県教委は平成 29 年 9 月 26 日付け教生文第 7-104 号にて事業主宛てに文化財認定通知を送付した。

（本庄市教育委員会事務局）



第 1 図 新宮遺跡調査地点

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境

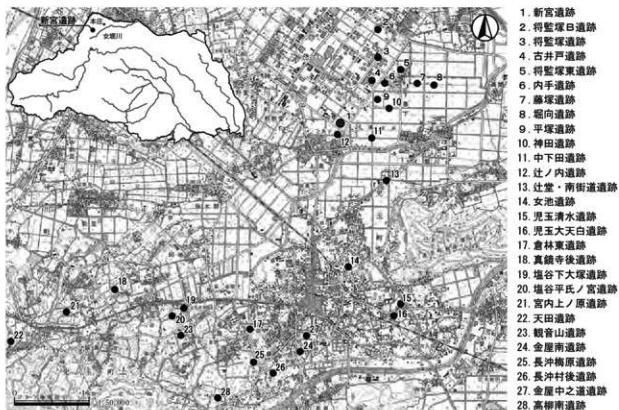
新宮遺跡は埼玉県本庄市に所在する。本庄市の南東側、児玉町中心部から北東約2.5kmに位置し、児玉工業団地の周辺区域として開発が進んでいる。本庄市の地形は南西側が上武山地、北東側は神流川扇状地が展開する。扇端部の深谷断層を境に烏川低地が展開しており、近世以降はこの低地帯に利根川が流下している。また上武山地に接して児玉丘陵が平野部に突出し、その延長上に生野山・大久保山の各残丘が点列状に位置している。神流川扇状地は本庄台地とも呼称されるが、この扇状部中央には金鑽川と赤根川が合流した女堀川によって開析された低地が形成されている。本遺跡の立地する本庄台地は神流川扇状地であり、女堀川の低地を臨む本庄台地東側縁辺部の標高約80mの平坦部に位置している。

2 歴史的環境

本遺跡では縄文時代中期の集落跡が検出されていることから、ここでは縄文時代中期の遺跡を中心に概観して述べる。

新宮遺跡はすでにA～D地点の調査がなされており、縄文時代中期の環状集落を構成する遺跡であることが想定されている。本遺跡の立地する本庄台地には、近接して将監塚遺跡(3)、古井戸遺跡(4)という同時期の大規模な環状集落が確認されている。また、北東方向に位置する将監塚東遺跡(5)では加曾利EⅢ式の堅穴住居跡が検出されており、将監塚遺跡が構成する環状集落の縁辺部に相当するものと捉えられている。

縄文時代中期の遺跡は、本庄台地南西方向の児玉丘陵においても、塩谷平氏ノ宮遺跡(20)、宮内上ノ原遺跡(21)などの集落遺跡が確認されている。また、児玉丘陵末端に連なる台地面に位置する長沖古墳群周辺には、金屋南遺跡(24)、長沖村後遺跡(26)、金屋中之道遺跡(27)が認められ、湧水点に近い台地面では児玉大天白遺跡(16)が確認されている。



第2図 周辺遺跡

第三章 調査の成果

1 調査の方法と遺跡の概要

新宮遺跡E地点は、C地点とD地点のおおよそ中間の位置にあたる。今回の調査では、遺構確認面が2面にわたっており、1面目で古墳時代後期、2面目で縄文時代中期後半の遺構を検出した。

1面目調査では、調査区北東隅で東西方向に走行する1号溝を検出した。Ⅱ層上面からⅣ層にかけて掘り込まれており、古墳時代後期に帰属するとみられる須恵器片と土師器片、縄文土器の小片が出土した。

2面目調査では、堅穴住居跡1軒、土坑11基、ピット36基を検出した。調査区南東壁の基本土層断面では、Ⅲ層中で遺構の掘り込みを確認した。しかし1面目の遺構確認面(Ⅱ層)での遺構の視認は困難であったため、調査区全体をⅣ層上面まで掘り下げて調査を行った。掘り下げたⅢ層中の遺物は、調査区全体を2×2mのメッシュで8つに区分して区画ごとに一括して取り上げた。ただし、大きな土器片や剥片は下面の遺構に伴う遺物かどうか判断した上で取り上げに努めた。Ⅳ層上面で検出した遺構からは、主に加曽利EⅡ～EⅢ式、曽利式、唐草文系の特徴を持つ土器が出土した。Ⅱ・Ⅲ層からは勝坂式の特徴を持つ土器片が少量出土している。E地点で検出した遺構は、縄文時代中期後葉に帰属するものが主体であると推測される。

2 検出された遺構と遺物

1号堅穴住居跡(図4～6, 写真図版1～3)

調査区西側の壁際に位置しており、遺構の約半分が調査範囲外である。規模は長軸19.2m、短軸は残存値で10.5m、深さ0.09～0.23mである。平面形状は検出した範囲から円形を呈することが推測される。断面形状は壁がほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、周溝が巡る。明確な地床は確認されなかったが、西壁付近で検出した8号土坑の埋没土に焼土ブロックが含まれ、壁付近に焼土範囲が確認されている。調査範囲外ではあるが、8号土坑付近に炉が位置する可能性が想定される。土坑・ピット・溝(図3～6, 表1～3, 写真図版1～4)

遺構の帰属時期は出土遺物や遺構の切り合い関係から判断した。出土遺物のない遺構は時期不明とした。これらの遺構については一覧表で報告する。

第2表 土坑一覧表

*単位はcm、()は残存値

遺構名	形態	規模	深さ	時期	出土遺物
1号土坑	円形	45 × 42	40	縄文時代中期後葉	縄文土器(深鉢)
2号土坑	円形	103 × 103	34	縄文時代中期中葉	縄文土器(深鉢)
3号土坑	円形	81 × 70	38	縄文時代中期中葉	縄文土器(深鉢)、石器
4号土坑	円形	100 × 102	43	縄文時代中期中葉	縄文土器(深鉢)
5号土坑	円形	156 × 99	99	縄文時代中期中葉	縄文土器(深鉢)、石器
6号土坑	不明	112 × 57	91	縄文時代中期後葉	縄文土器(深鉢)、石器
7号土坑	楕円形	75 × 63	46	縄文時代	
8号土坑	円形	56 × 57	25	縄文時代中期後葉	縄文土器(深鉢)
9号土坑	円形	65 × 53	23	縄文時代中期後葉	縄文土器(深鉢)
10号土坑	円形	89 × 73	26	縄文時代中期後葉	縄文土器(深鉢)
11号土坑	不整形	58 × 45	38	縄文時代	

第2表 ピット一覧表

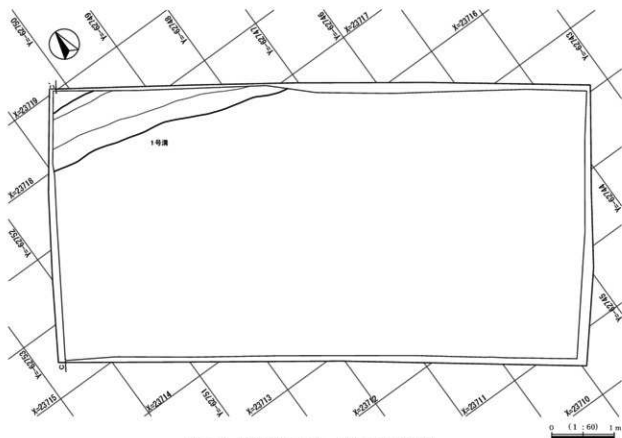
*単位はcm、()は残存値

遺構名	形態	規模	深さ	遺構名	形態	規模	深さ	遺構名	形態	規模	深さ
1号ピット	楕円形	48 × 35	47	13号ピット	円形	34 × 28	34	25号ピット	楕円形	37 × 26	13
2号ピット	楕円形	43 × 29	51	14号ピット	不明	40 × 11	20	26号ピット	不整形	47 × 36	25
3号ピット	楕円形	32 × 26	30	15号ピット	木桶形	21 × 15	42	27号ピット	円形	18 × 16	17
4号ピット	不明	32 × 18	18	16号ピット	不整形	23 × 19	33	28号ピット	楕円形	36 × 26	14
5号ピット	円形	35 × 26	70	17号ピット	楕円形	26 × 18	14	29号ピット	不整形	51 × 57	29
6号ピット	円形	33 × 30	57	18号ピット	不整形	59 × 42	55	30号ピット	楕円形	22 × 17	20
7号ピット	楕円形	39 × 28	48	19号ピット	不整形	31 × 27	42	31号ピット	楕円形	46 × 38	28
8号ピット	円形	39 × 26	28	20号ピット	円形	45 × 46	17	32号ピット	楕円形	32 × 22	25
9号ピット	不整形	40 × 26	32	21号ピット	円形	27 × 24	69	33号ピット	楕円形	27 × 19	31
10号ピット	不明		32	22号ピット	楕円形	32 × 26	16	34号ピット	円形	20 × 20	21
11号ピット	楕円形	36 × 27	21	23号ピット	不整形	18 × 17	24	35号ピット	楕円形	30 × 24	25
12号ピット	楕円形	37 × 33	27	24号ピット	不整形	13 × 10	18	36号ピット	楕円形	25 × 12	11

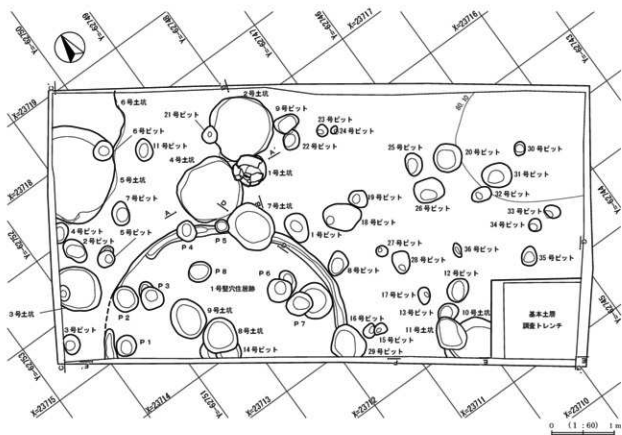
第3表 溝一覧表

*単位はcm、()は残存値

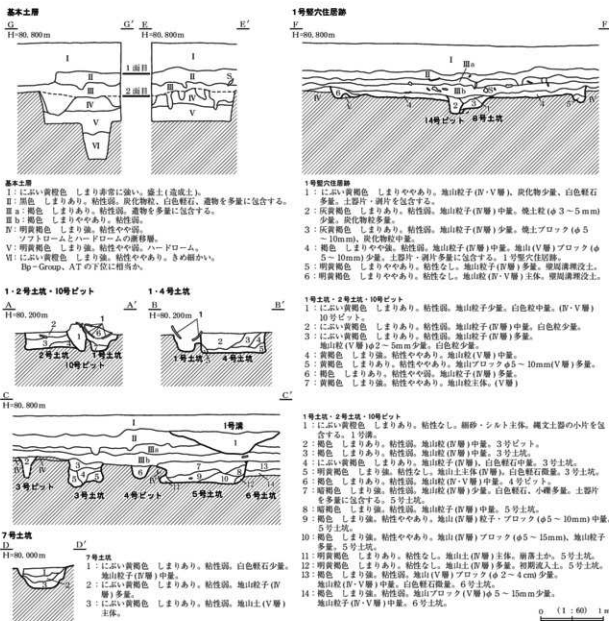
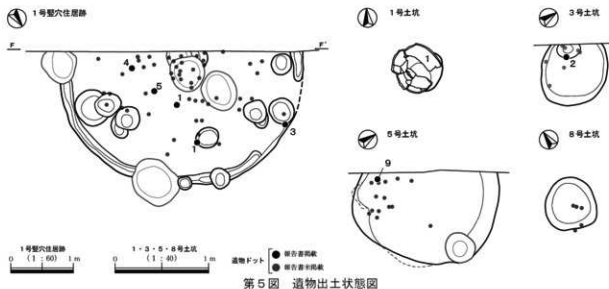
遺構名	形態	検出上端	検出下端	深さ	時期	出土遺物
1号溝	直線	54～59	41～51	9～23	古墳時代後期	須恵器(甕)、土師器(坏)破片

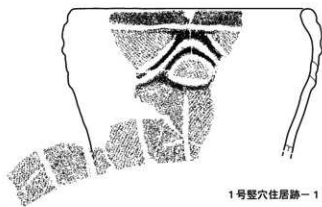


第3図 新宮遺跡E地点 全体図（古墳時代）

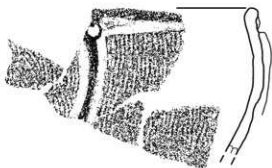


第4図 新宮遺跡E地点 全体図（縄文時代）

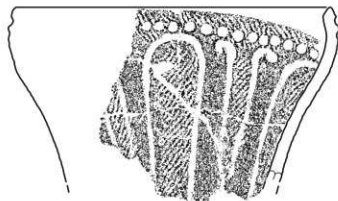




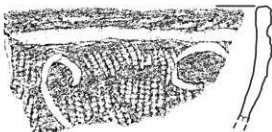
1号竖穴住居跡-1



1号竖穴住居跡-2



1号竖穴住居跡-3



1号竖穴住居跡-4



1号竖穴住居跡-5



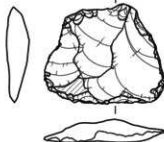
3号土坑-1



3号土坑-2



2号土坑-1

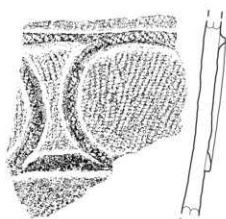


3号土坑-3

1号竖穴住居跡-1
0 10cm
1:6

1号竖穴住居跡-2~5、2~3号土坑
0 10cm
1:3

第7図 遺物実測図(1)



5号土坑-1



5号土坑-2



5号土坑-3



5号土坑-4



8号土坑-1



6号土坑-1

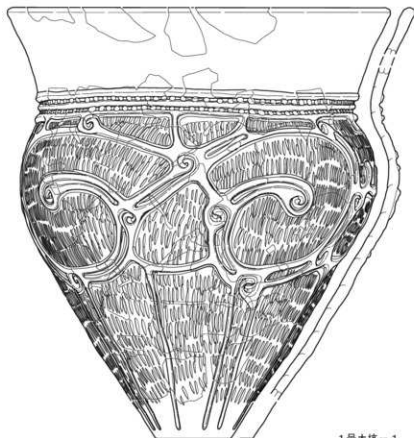


6号土坑-2



調查区外-1

0 5・6・8号土坑・調査区外 10cm 1:3



1号土坑-1

0 1号土坑 10cm 1:6

第8圖 遺物実測圖(2)

第4表 遺物観察表（土器）

*法量：（ ）は現存値、< >は推定値である。

遺物番号	器種	法量 (cm)	文様・形態・整形手法の特徴	胎土・色調	時期
1号壺穴-1	深鉢	口径：(37.4) 器高：(22.8)	口唇部肥厚→下に丸棒状工具による横位沈澱。口縁部は隆起による円形・半円形区画→単軸R L 縄文を横位施文→同工具による沈澱。胴部に懸垂文による区画→単軸R L 縄文を縦位施文→懸垂文を磨り消し。内面横位ナデ。	石英・長石・赤色粒・黒色粒 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期後葉
1号壺穴-2	深鉢	口径：(25.0) 器高：(13.8)	口唇部肥厚→下に丸棒状工具による横位沈澱。口縁部は単軸R L 縄文を斜位施文→口唇部から斜位隆起を貼付→隆起部に同工具による沈澱を沿わせる→口縁部中央に刺突。内面ヨコナデ。	石英・長石・片岩 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期後葉
1号壺穴-3	深鉢	器高：(11.7)	平縁口縁。口縁部に単軸R L 縄文を横位施文→口唇部下に円形刺突。胴部に単軸R L 縄文を縦位施文→丸棒状工具による懸垂文の横内区画を縦手文→区画面を磨り消し。内面横位ナデ。	石英・長石・片岩 内外：にぶい黄褐色 外：灰黄褐色	縄文時代中期後葉
1号壺穴-4	深鉢	器高：(10.2)	口唇部肥厚→下に丸棒状工具による横位沈澱。口縁部に単軸R L 縄文を横位・斜位施文→丸棒状工具による縦手文を施文→縦手文内を磨り消し。内面横位ナデ。	石英・長石・片岩・赤色粒 内外：にぶい黄褐色 外：にぶい赤褐色	縄文時代中期後葉
1号壺穴-5	深鉢	器高：(7.8)	胴部破片。垂下する隆起による懸垂文と渦巻文が。丸棒状工具による斜位沈澱を充填→隆起部に同工具による沈澱を沿わせる。内面横位ナデ。	石英・長石・片岩 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期後葉
1号土坑-1	深鉢	口径：(61.0) 器高：(62.5)	平縁口縁。口唇部肥厚。口縁部無文。胴部に2条の横位隆起を貼付→隆起間に丸棒状工具による交互刺突。胴上部に隆起による縦手文・渦巻文による区画。胴下部に垂下隆起を貼付→区画内より隆起部に丸棒状工具による縦位・斜位沈澱を充填→隆起部に同工具による沈澱を沿わせる。内面ナデ。	石英・ ϕ 2 ～ 5 mm 縦・長石・片岩 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期後葉
2号土坑-1	深鉢	器高：—	口縁部突起。隆起による渦巻文→半軸管状工具による半径起線を沿わせる。同工具と踏伏工具によるキザミを充填。内面に踏伏工具によるキザミ。内面ナデ。	石英・長石・雲母・片岩 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期中葉
3号土坑-1	深鉢	器高：(3.9)	胴部破片。隆起を貼付→半軸管状工具・棒状工具によるキザミを沿わせる。三叉文・円文を充填。内面横位ナデ。	石英・長石・白色粒・赤色粒 内外：灰褐色 外：灰褐色	縄文時代中期中葉
3号土坑-2	深鉢	器高：(8.6)	胴部→底部の破片。横位・縦位隆起部貼付→隆起部に半軸管状工具による平行沈澱を沿わせる。内面横位ナデ。	ϕ 0.5 ～ 3 mm 片岩・石英・長石・チャート・片岩 内外：にぶい赤褐色 外：にぶい黄褐色	縄文時代中期中葉
5号土坑-1	深鉢	器高：(15.5)	胴部破片。単軸R L 縄文を斜位施文→2条の横位隆起と横内区画に貼付隆起上面に単軸R L 縄文を横位施文→隆起部に丸棒状工具による沈澱を沿わせる。内面斜位ナデ。	石英・長石・チャート・片岩 内外：にぶい赤褐色 外：にぶい黄褐色	縄文時代中期中葉
5号土坑-2	深鉢	器高：(6.7)	口縁部破片。口唇部肥厚。口縁部に隆起部貼付→隆起部に半軸管状工具による半径起線を施文→隆起上面に踏伏工具によるキザミ。隆起部に丸棒状工具による三叉文を充填。内面横位ナデ。	石英・長石・白色粒 内外：灰黄褐色 外：灰褐色	縄文時代中期中葉
5号土坑-3	深鉢	器高：(4.8)	胴部破片。縦位隆起を貼付→隆起上に半軸管状工具によるキザミ。隆起部に同工具による押し引き文。隆起部に同工具によるキザミと渦巻文。内面横位ナデ。	石英・長石・赤色粒 内外：黒 外：にぶい黄褐色	縄文時代中期中葉
5号土坑-4	深鉢	器高：(8.8)	胴部→胴部破片。隆起を貼付→隆起部に角棒状工具による2列の角押文を施文。区画内に単軸R L 縄文を斜位施文。内面横位ナデ。	石英・長石・赤色粒 内外：にぶい黄褐色 外：灰褐色	縄文時代中期中葉
6号土坑-1	深鉢	器高：(6.5)	胴部破片。隆起による横内区画→棒状工具による円文。垂下隆起→隆起間に半軸管状工具による半径起線を沿わせる。隆起の接線部にコイル状突起を貼付。内面斜位ナデ。	石英・長石・白色粒 内外：灰黄褐色 外：にぶい赤褐色	縄文時代中期中葉
6号土坑-2	深鉢	器高：(7.3)	口縁部突起。口唇部肥厚。口縁部に単軸R L 縄文を縦位施文。隆起を渦巻文に貼付→隆起部に丸棒状工具による渦巻文を施文。内面横位ナデ。	石英・長石・片岩・赤色粒 内外：にぶい黄褐色 外：にぶい赤褐色	縄文時代中期後葉
8号土坑-1	深鉢	器高：(6.4)	口縁部突起。単軸R L 縄文を縦位施文→突起上面から丸棒状工具による縦手文を施文。内面横位ナデ。	石英・白色粒・チャート・片岩 内外：にぶい黄褐色	縄文時代中期後葉
調査区外-1	深鉢	器高：(7.0)	平縁口縁。小突起あり。口縁部2条の横位沈澱間にキザミ。沈澱下に単軸R L 縄文を横位施文→横位ナデ。内面横位ナデ。	石英・長石・雲母 内外：にぶい褐色	縄文時代後期

第5表 遺物観察表（石器）

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	製作技法・特徴
1号壺穴-6	石匙	安山岩	<6.9>	<4.5>	1.2	30.5	縦型。薄型剥片を素材とし、二側縁に両面加工を施し、上部につまみを出す。中央→下部欠損。
1号壺穴-7	打製石斧	デイサイト	<6.9>	<4.9>	<1.6>	58.4	剥片を素材とし両縁を直接打撃による両面加工を施す。側縁部中央に浅い・狭い認められる。刃部欠損。
1号壺穴-8	凹石	片岩	<10.4>	<9.8>	<2.8>	472.2	縦面に扁平状の凹欠が1穴あり。欠損部。大型石種の破片の可能性も考えられる。
3号土坑-3	打製石斧	頁岩	<3.9>	<4.6>	<1.2>	22.2	刃部片。刃部両面に磨製痕あり。
3号土坑-4	S c	黒色安山岩	<6.1>	<8.5>	2.6	154.4	縦度をもちつ片の一端縁に両面加工を施し刃部とする。被熱による黒色化がみられる。欠損部。
3号土坑-5	S c	頁岩	8.0	9.7	1.9	136.6	薄型剥片を素材とし、縁切部に両面加工を施す。両側縁に顕著な微細割痕あり。
3号土坑-6	R F	黒曜石	3.7	1.8	1.4	6.9	砕片の縁上に微細割痕が認められる。
3号土坑-7	R F	頁岩	9.9	3.6	2.0	47.6	縦長剥片の一端縁に不連続な微細割痕あり。
5号土坑-5	打製石斧	ホルンフェルス	10.9	5.2	2.1	112.5	割縁を素材とし、両側縁を直接打撃による両面加工を施す。
5号土坑-6	R F	ホルンフェルス	5.9	4.1	1.6	44.0	一端縁に不連続な片面加工が施される。風化顕著。
5号土坑-7	燧石	砂岩	7.7	9.4	3.7	361.5	割縁を素材とし、両側縁に敲打痕および割痕が顕著。
6号土坑-3	剥片	ホルンフェルス	6.7	4.8	1.3	32.1	小型。

*1: RF (リタッチドブレイク)。Sc (スクレイパー)。*2: 3号土坑-3のみ実測図を掲載。その他の石器は写真のみ掲載した。*3: () は推定値。

参考文献 「南和・新宮遺跡」見玉町遺跡調査報告書第6・7集 見玉町遺跡調査会

「新宮遺跡Ⅱ-C地点の調査」本市市道調査報告書第42集 本市市道調査会

「竹野遺跡-縄文時代-」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第43集 埼玉県埋蔵文化財調査事業調査会

「合井戸-縄文時代-」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業調査会

写真図版



新宮遺跡 E地点（北から）



新宮遺跡E地点 全景（左上が北）



1 面目 遺構検出状態（西から）



1号溝 完掘状態（西から）



2 面目 遺構検出状態（北西から）



2 面目 全景（北から）

図版 2



1号竪穴住居跡 遺物出土状態（西から）



1号竪穴住居跡 完掘状態（西から）



1号土坑 遺物出土状態①（北から）



1号土坑 遺物出土状態②（南から）



4号土坑 完掘状態（東から）



1・2・4号土坑 完掘状態（東から）



5・6号土坑 完掘状態（東から）



8・9号土坑 完掘状態（北東から）

圖版 3



1号豎穴・3号土坑・石器 S Ⅲ/3

3号土坑-1・2 S Ⅲ/2



3号土坑-5



3号土坑-6



3号土坑-7



5号土坑-1



5号土坑-2



5号土坑-4



5号土坑-3



8号土坑-1



5号土坑-5



5号土坑-6



5号土坑-7



6号土坑-1



6号土坑-2



6号土坑-3



调查区外-1

5号土坑-1・石器 S与1/3

5・6・8号土坑 S与1/2

報告書抄録

ふりがな	しんぐういせき3							
書 名	新宮遺跡Ⅲ							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 52 集							
編著者名	小此木 真理							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 Tn 0495-25-1185							
発行年月日	2017（平成29）年 12 月 11 日							
所収遺跡	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
新宮遺跡	埼玉県本庄市児玉町 埼玉県本庄市南共和32番地	54	030	36° 12' 41"	139° 08' 07"	20170424 ～ 20170502	32 m ²	民間工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新宮遺跡 E地点	集落跡	縄文時代 古墳時代		堅穴住居跡 1軒 土坑 11基 ピット 36基 溝 1条		縄文土器、土偶、石鏃、磨石、敲石、石皿、スクレイパー、砥石、剥片、打製石斧、磨製石斧 土師器・須恵器		縄文時代中期後半の集落跡と古墳時代の溝が検出された。

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第52集

新宮遺跡Ⅲ (E地点の調査)

平成29年12月1日 印刷

平成29年12月11日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

Tn 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社